

# 現代の公共圏とコミュニケーションをめぐる一考察

—「菜の花プロジェクト」を例に—

増田 知也・沢井 智子・門田 志乃・加藤 良太

## あらまし

本稿では、滋賀県東近江市（旧愛東町）から全国に展開した「菜の花プロジェクト」による循環型地域社会形成の試みを採り上げ、現代の公共圏とコミュニケーションのあり方について、ハーバーマス（Jürgen Habermas）の「市民的公共圏（性）」の概念に基づく分析を行った。

具体的には、市民的公共圏には、対等性・柔軟性・公開性という3つの基準があることに着目し、菜の花プロジェクトが、「対等性」の面では多様な主体の参加とその促進、「柔軟性」の面では地域の問題解決の枠組みの住民への開放、「公開性」の面ではウェブサイトを通じた情報公開や、研究交流イベントのオールセッション型の開催などを通じ、3つの基準を満たすことを検証した。また、現代の市民的公共圏の複合化という状況において、菜の花プロジェクトが「地域」と「全国」、あるいは「市民と市民」「専門家と専門家」と「市民と専門家」間の「二層のコミュニケーション」を維持することで、生活世界との関係を保ち、3つの基準を維持していることを明らかにした。

以上のことから、現代の市民的公共圏の形成・存続には、親密圏たる生活世界に根づいた継続的なコミュニケーションのある活動から立ち上がっていること、対等性・柔軟性・公開性の3つの基準を満たしていること、自らの複合化を受け入れ発展させつつ、その中で二層のコミュニケーションを維持していくことが必要であると考えらる。

## 1. はじめに

近年、日本各地の地域づくり、まちづくりの主体として、あるいは地域における公共政策の担い手として、ボランティアな市民やNPOの存在は欠かせないものとなっている。阪神・淡路大震災（1995年）以来の日本社会の経験・学びや、それに伴う法制度面、あるいは物心両面の官民の後押しもあって、「参加（あるいは参画）と協働」のキーワードは、その実態を伴って十分に定着した感がある。

一方で、地域づくりの担い手としての市民、NPOの参加は、その内実を問われる段階に立っているとも言える。地域の公共政策は、地方分権により国から地域へ、さらに地方自治体から地域社会へと徐々に「解放」され、ガバナンス概念に表現されるように、さまざまな政策アクターが「参加と協働」して進められる事例が増えている。分野によっては、市民、NPOがその中核となって進める公共政策も現われている。このように、「政府」主体のシステムから解放された地域の問題解決、政策実現のプロセスは、さまざまなアクターの参加を得て「公共圏」として再形成されることになる。そこでは、当然のことながら、多様な個性を持ったアクター間のコミュニケーションが主要な関心となる。コミュニケーションの成否が公共圏の形成の成否、ひいては、地域づくりの力量の格差となって現われる。そして、こうしたコミュニケーション能力や、それをオーガナイズする能力は、地域づくりの主体として台頭する市民、NPOにも求められているのである。

本稿では、以上のような問題関心に基づきつつ、具体的な事例として、滋賀県東近江市（旧

愛東町) から全国に展開した「菜の花プロジェクト」<sup>1)</sup>による循環型地域社会形成の試みを採り上げ、現代の公共圏とそこにおけるコミュニケーションのあり方について、考察を深めようとするものである。具体的には、市民的公共圏には、対等性・柔軟性・公開性という3つの基準があることに着目し、菜の花プロジェクトが、「対等性」の面では多様な主体の参加とその促進、「柔軟性」の面では地域の問題解決の枠組みの住民への開放、「公開性」の面ではウェブサイトを通じた情報公開や、研究交流イベントのオールセッション型の開催などを通じ、3つの基準を満たすことを検証する。また、現代の市民的公共圏の複合化という状況において、菜

の花プロジェクトが「地域」と「全国」、あるいは「市民と市民」「専門家と専門家」と「市民と専門家」間の「二層のコミュニケーション」を維持することで、生活世界との関係を保ち、3つの基準を維持していることを明らかにする。このような分析を通じて、現代における市民的公共圏のあり方やその形成についての一定の知見を導き出し、今後の研究課題を提示してみたい<sup>2)</sup>。

## 2. 菜の花プロジェクトとは

菜の花プロジェクト<sup>3)</sup>について述べる前に、そ

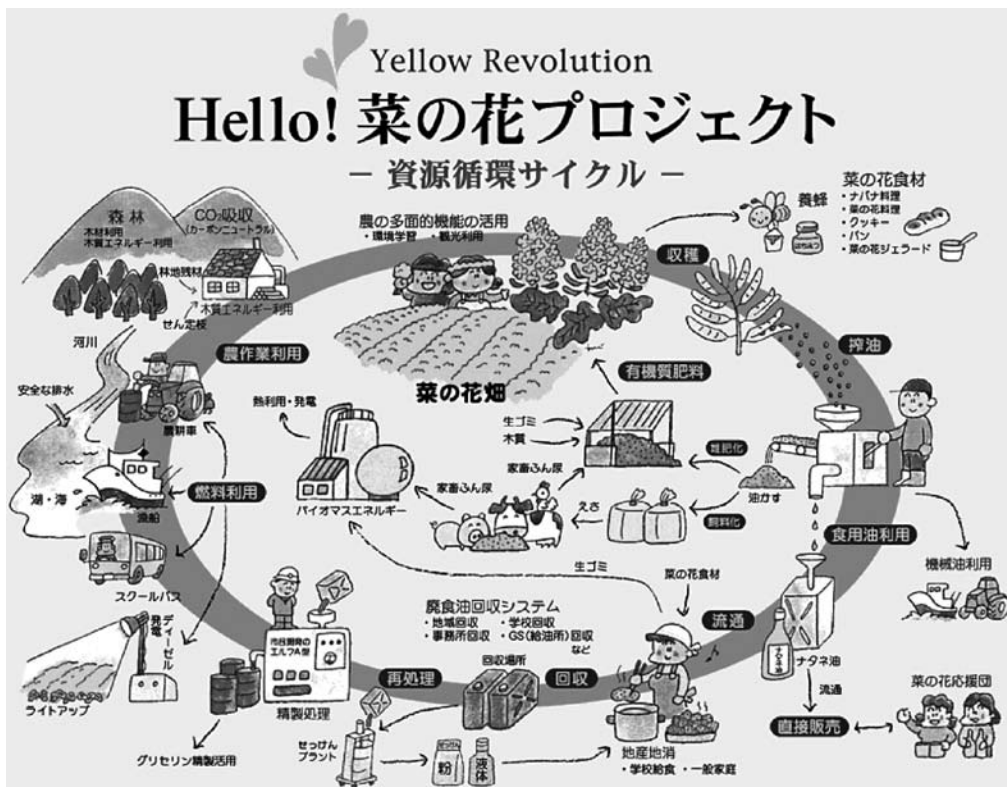


図1 菜の花プロジェクトの概念

出典：菜の花プロジェクトネットワーク・ウェブサイト  
(<http://www.nanohana.gr.jp/index.php> 2007年3月18日閲覧) より引用。

<sup>1)</sup> 以下「菜の花プロジェクト」を菜の花プロジェクトと表記する。

<sup>2)</sup> 本稿は、「第二回政策系大学・大学院研究交流大会」(2006年12月10日)における報告、増田知也、門田志乃、加藤良太、沢井智子『「菜の花」を介した循環型地域社会形成の研究 ―公共圏におけるコミュニケーションの視点から―』を基に、同報告時の指摘、議論などを踏まえ、さらに調査研究を進めて執筆したものである。

<sup>3)</sup> 菜の花プロジェクトおよび「菜の花プロジェクトネットワーク」に関する以下の記述は、藤井絢子『菜の花エコ革命』創森社、2004年および、菜の花プロジェクトネットワーク・ウェブサイト(<http://www.nanohana.gr.jp/index.php> 2007年3月18日閲覧)を参照。

の活動の中心的存在である滋賀県環境生活協同組合<sup>4</sup>の活動経緯について紹介する。環境生協設立のきっかけは、1977年の琵琶湖における大規模な赤潮発生であった。赤潮の主な原因は、リンを含む合成洗剤であったため、その代替としてせっけんを使用しようと呼びかける住民運動が起こった。このせっけん運動の中で、環境生協が作られた。せっけん運動は、自治体や企業に対する反対のみにとどまらず、積極的に代替案を提示して参加を呼びかけるという点が、当時としては珍しいものであった。しかし、無リン合成洗剤が発売されたことで、せっけんの使用率が下がり、回収する廃食油が行き場を失ってしまった。そこで、軽油代替燃料（BDF）化を目指すという新たな取り組みが始まった。環境生協にはBDFプラントの開発に投資できるほどの予算はなかったため、環境庁の助成金を得る受け皿として、愛東町が名乗りをあげ、滋賀県立大学の協力も得て、プラントを開発した。BDF化の活動開始に目処がたつてくると、今度は逆に、回収する廃食油だけでは足りなくなった。そこで、ドイツでの取り組みを参考に、ナタネ栽培の構想が持ち上がった。それが、資源循環型の持続可能な地域社会形成をめざす試みである、菜の花プロジェクトである（図1）。

菜の花プロジェクトには年間200以上の団体が視察に訪れ、活動の輪は滋賀県全域だけでなく、全国へ広まった。2001年、全国各地の取り組み団体や関心を持つ人が一堂に集まり、交流を図る機会をとという目的で、「第一回菜の花サミット」が開催された。この中で（1）「菜の花プロジェクトネットワーク」<sup>5</sup>の設立、（2）サミットの継続開催、が合意された。菜の花プロジェクトネットワークは、各地域・各活動主体の相互交流を促進し、より有効なモデルを作り上げていくという目的のため設立された。「菜の花サミット」は、2001年以降、海外を含めて6回開催され、2007年6月には山形県で7回目の開催が予定されている。

ほかにも、2004年から「菜の花プロジェクトを学び、楽しむ会」として、「全国菜の花学会・楽会」が毎年開催されている。そこでは、「全国リレートーク」という全国各地における取り

組み事例の報告がなされている。参加者が自分の地域での独自の取り組みを互いに発表し合うことで、相互に刺激を与え合い、各地での活動を継続的に発展させていくための仕組みとして効果をあげている。リレートークでは、高校生、大学生、大学教授、市民団体、企業、自治体など、様々な年齢・所属の報告者が、同じように壇上に登り、平等な立場で報告を行なっている。2006年8月26日の「第3回全国菜の花学会・楽会 in 東近江」は、「菜の花プロジェクトが地域の力となるためには」をテーマとして開催された。ここでは、「菜の花栽培」「食」「BDF」「地域活性化」の4つのセッションがすべて同じ会場で報告される、オールセッション形式で行なわれた。菜の花プロジェクトネットワークが「未来世代」と呼ぶ、高校・大学等の生徒・学生による報告にも力が入れられ、たとえば、ある農業高校からは、遺伝子組み換えでない安全なナタネの栽培方法についての研究、さらにはナタネ油を利用した食の研究とその食を介しての異世代交流によって、地域とともに新しい食の再発見を推進しているとの報告が行われた。ある工業高校からは、BDFミニプラントを用いて製造実演を行うなど地域環境教育に対して技術支援を行っているほか、BDFカードを製作して試乗体験会を行うなど、様々な場で啓発活動を行い、地域における環境意識向上を推進しながら必要な技術について学んでいるとの報告がそれぞれ行われた。ほかにも、地域の祭り・伝承など、昔ながらの地域とのつながりと関わりながらの活動の様子も紹介された。また、学会の前には地域の食材を使った昼食会が開かれ、積極的に参加者間の相互交流が行える場を提供する工夫がみられた<sup>6</sup>。このように、菜の花プロジェクトでは、「市民と市民」「市民と専門家」「専門家と専門家」「若年齢層と高年齢層」間のコミュニケーションが図られている。

菜の花プロジェクトは、外部に対して情報を積極的に公開し、外部からの参加に対しても開かれた態勢を取っている。菜の花プロジェクトネットワークのウェブサイトでは、ネットワーク設立の趣旨から、活動の経緯のほか、2001年度からの活動が写真付きで紹介されているな

<sup>4</sup> 以下、環境生協と表記する。

<sup>5</sup> 以下、「菜の花プロジェクトネットワーク」を菜の花プロジェクトネットワークと表記する。

<sup>6</sup> 「第3回全国菜の花学会・楽会」の内容については、筆者の参与観察による。

ど、ウェブサイトを見ただけで、菜の花プロジェクトの概要を知ることができる。「菜の花学会・楽会」などのイベントには、誰でも自由に参加することができ、実際、筆者も「菜の花学会・楽会」に参加し、その様子を観察することができた。これは、菜の花プロジェクトが高い公開性を持っていたためであろう。

次章以降、菜の花プロジェクトを、ハーバーマスの市民的公共圏の概念を基にして分析していく。

### 3. 市民的公共圏と生活世界

前章で取り上げた菜の花プロジェクトの分析を進めるにあたって、本稿ではハーバーマスの「生活世界とシステム」の構図を一部改変し、生活世界がシステムを制御するための（場合によってはシステムに制御される）入出力装置として、公共圏を捉えることにする。ハーバーマスは『コミュニケーション的行為の理論』において、社会空間を生活世界とシステムとに分割し、生活世界の中に親密圏と公共圏を、システムの中に国家と市場を、それぞれ位置づけた<sup>7</sup>。しかし、花田はハーバーマスの「生活世界とシ

ステム」の構図の問題点を指摘する。第一に、システムが実態的であるのに対して、生活世界は規範的であること。第二に、システムが国家と経済から成る一体のものとして捉えられていることである。そのため、ハーバーマスの「生活世界とシステム」の構図では、システムによる生活世界の植民地化という現象だけが強調され、生活世界の中の実態や規範的なシステムの可能性を捉えることができなかった<sup>8</sup>。

そこで、本稿では、公共圏を生活世界とシステムとを媒介するものとして位置づける。システムは国家や経済に留まらず、社会の中で特殊化・専門化した処理を行う領域として再定義する。たとえば、NPOや情報ネットワークなども、一つのシステムとして機能する可能性がある。

公共圏の媒介機能には、一方向のものと、双方向のものが考えられる。一方向のものは、システムからの情報を一方的に広報する機能である。このような機能を持つ公共圏は、ハーバーマスが言うところの、操作的ないし代表具現的公共圏である。ここでのシステムは、生活世界からの制御を受けず、自己完結的なものとなる。それに対し、生活世界とシステムとを双方向に媒介し、生活世界によるシステムの制御を働かすことのできる公共圏が、市民的公共圏である

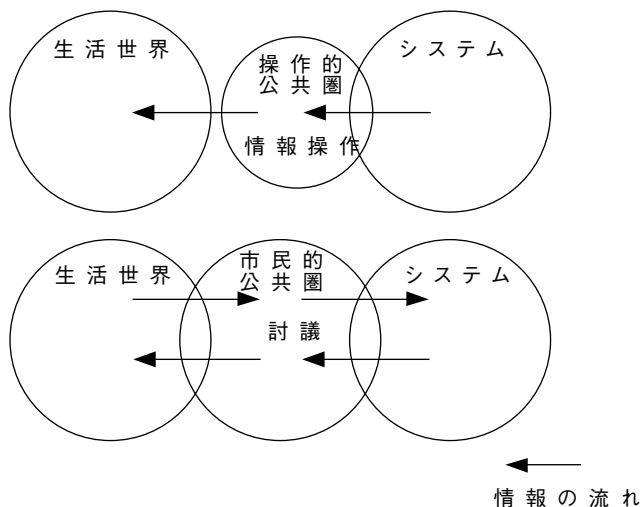


図2 操作的公共圏と市民的公共圏

出典：ハーバーマス（1987）、花田（1999）を参考に筆者が作成。

<sup>7</sup> ユルゲン・ハーバーマス、丸山高司訳『コミュニケーション的行為の理論下』未來社、1987年。

<sup>8</sup> 花田達朗『メディアと公共圏のポリティクス』東京大学出版会、1999年、31-33ページ。

(図2)。

ハーバーマスは『公共性の構造転換』の前半で、18世紀から19世紀初頭のイギリス・フランス・ドイツにおいて、親密圏の中から文芸的公共圏が立ち上がり、やがて政治的公共圏が成立する過程を示した。当時の市民的公共圏の成立過程を本稿の構図に位置づけると、生活世界から徐々に公共圏が立ち上がり、やがてシステムに影響を与えていく過程として捉えることができる。

ハーバーマスによれば、こうして形成された市民的公共圏には3つの基準があった。第一に「社会的地位を度外視するような社交様式が要求される」こと(対等性)、第二に「それまで問題なく通用していた領域を問題化することを前提としている」こと(柔軟性)、第三に「万人がその討論に参加しうる」こと(公開性)である。対等性は、論理が権威に対抗することを可能にする。柔軟性は、権威的なものに縛られずに自由に討議することを可能にする。公開性は、討議される問題を、誰もが接近できるという意味で「普遍的」なものにする<sup>9</sup>。つまり、市民的公共圏は3つの意味で生活世界に対して開かれている。

3つの基準を維持することは、公共圏が高度化すればするほど難しくなる。ハーバーマスは、社会が複合的になるのに応じて、公共圏もまた複合的になるという<sup>10</sup>。空間の面では、地域的な公共圏に対して、広域的な公共圏が現われ、内容の面では、非専門的な公共圏に対して、専門的な公共圏が現われ、抽象度の面では、コーヒーハウスのような具体的な公共圏に対して、国民全体を含むような抽象的な公共圏が現われるのである(表1)。加えて、広域化・専門化・

抽象化した公共圏では、生活世界からの距離が拡大すると筆者は考える。生活世界からの距離が拡大すればするほど、公共圏は生活感を喪失し、より操作的なものになる。ハーバーマスが『公共性の構造転換』の後半で示したのは、公共圏が高度化する中で、生活世界によるコントロールを失い、構造転換する過程であった。逆に、3つの基準が維持できれば、高度化した公共圏はより生活世界に近い公共圏に対して開かれていることになる。そして、このような開かれた公共圏同士がネットワークを形成することで、生活世界からの制御をシステムに及ぼすことができる。

市民的公共圏を形成し、維持するにあたって重要な点は、生活世界との関係性にある。まず、市民的公共圏は生活世界を地盤に、生活世界の延長として立ち上げられなければならない。そして、複合化した公共圏の中でも、それぞれの公共圏が討議における対等性・柔軟性・公開性を維持することで、生活世界との繋がりを保ち続ける必要がある。

#### 4. 菜の花プロジェクトの分析

本章では、先に述べた市民的公共圏の3つの基準をもとに、菜の花プロジェクトの特徴について分析を行う。

第一に、「社会的地位を度外視した対等性を保障しているか」という観点である。菜の花プロジェクトは、次々と周囲を巻き込む形で活動の幅を広げてきた結果、多種多様な分野から、立場も世代も異なる人々が参加し、ネットワークを形成している。たとえば、昨年開催された

表1 公共圏の複合化

生活世界からの距離	近い	↔	遠い
空間	地域的な公共圏	↔	広域的な公共圏
内容	非専門的な公共圏	↔	専門的な公共圏
抽象度	具体的な公共圏	↔	抽象的な公共圏

出典：ハーバーマス(1994)、56-57ページを参考に筆者が作成。

<sup>9</sup> ユルゲン・ハーバーマス、細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換 第2版』未來社、1994年、56-57ページ。

<sup>10</sup> ユルゲン・ハーバーマス、三島憲一他訳『近代の哲学的ディスカルス』岩波書店、1999年、616ページおよびユルゲン・ハーバーマス、河上倫逸・耳野健二訳『事実性と妥当性—法と民主的法治国家の討議理論にかんする研究(下)』未來社、2003年、105ページ。

「第3回全国菜の花学会・楽会 in 東近江」においては、「市民と市民」、「専門家と専門家」、「市民と専門家」、「若年齢層と高年齢層」間における対等性の保障が見受けられた。「市民と市民」間の交流としては、全国各地で菜の花プロジェクトに取り組む市民間の情報交換がランチパーティーなどの時間を利用して行われた。「専門家と専門家」間の交流としては、都市工学と環境学、食物学など、専門を異にする高校や大学間の交流や、生産者と農機具製造メーカー間の交流が行われた。「市民と専門家」間の交流としては、菜の花の生産者と消費者間を中心とした交流が行われた。「若年齢層と高年齢層」間では、長年プロジェクトに携わっている者だけでなく、高校生のように短期間プロジェクトに携わっている者同士の交流が図られるように工夫されていた。これは、大人同様にプロジェクトへ取り組んでいながら、年齢を理由に発表機会の少ない未来世代への機会提供を積極的に行おうという菜の花プロジェクトの運営姿勢が反映されたものである。これにより、専門的な知識や技術を有しているか否かにかかわらず、対等の立場でプロジェクトに関わることが可能となっている。

第二に、「既存の概念に捉われない柔軟性を持ち、自由な論議が可能な場であるか」という点である。プロジェクトの元となった「せっけん運動」開始当時は、公共の課題は行政の領域という認識がまだ根強く、住民運動といえ、対行政の反対運動が中心であった。これに対し、せっけん運動では、地域の問題は地域で解決する「地域の自立」「地域の自律」という生活世界に根ざした新しい概念を打ち出した。これは、代替案の提示と共感の拡大を目指し、住民自らが地域の問題解決について主体的に関わり、自由に論議をする基礎を作り出した。

このノウハウを生かし、菜の花プロジェクトにおいては、対等性で取り上げたようなさまざまな交流を生み出してきた。この交流が、次章で述べる「二層のコミュニケーション」を作りだすきっかけとなっていく。

第三に、「万人がその議論に参加しうる公開

性を有しているか」という点である。ウェブサイトでは、誰もがプロジェクトに関する基礎知識を入手できるだけでなく、シンポジウムや全国菜の花学会・学会の情報が入手できる。また、各地での取り組みも紹介されており、全国的なコミュニケーション作りに一役かっている。

「全国菜の花学会・楽会」においては、4つのセッションを分科会方式で開催せず、同じ会場で連続して行っている。そのため、すべての参加者が、自分の興味関心とは違う内容の報告を聞くことで、菜の花プロジェクトの情報全体を俯瞰できる工夫がなされている。また、関係者だけでなく、筆者のようにプロジェクトに関わったことのない者であっても学会・楽会に参加できることから、このプロジェクトの公開性の高さが伺える。

さらには、菜の花プロジェクトを知らない者であっても、湖東地区で開催されるコトナリエ<sup>11</sup>という光の祭典の来場者として、プロジェクトに参加できる。また、マーガレットステーションに立ち寄る観光客は、菜の花プロジェクトで作られた廃油せっけんを購入することが可能である。このように、菜の花プロジェクトに関わっていない人でも、プロジェクトに参加できる工夫がなされている。

## 5. 現代における市民的公共圏の形成と存続

前章での3つの基準による分析により、菜の花プロジェクトは、ハーバーマスのいう市民的公共圏としての基準を満たして、現代における市民的公共圏の一つの例であることが確認できた<sup>12</sup>。そこで、菜の花プロジェクトの市民的公共圏としてのあり方を通じて、現代における市民的公共圏の形成と存続に必要な条件を考えてみたい。

市民的公共圏が、生活世界に依拠し、その要請に従ってシステムを制御するためのものだとすれば、その形成は親密圏としての生活世界から立ち上がっていくものでなければならない。実際、近代初頭の市民的公共圏は、さまざまな

<sup>11</sup> コトナリエは、菜の花プロジェクトで作られたBDFを利用して行われている。

<sup>12</sup> 菜の花プロジェクトには、特殊化・専門化した処理を行うという、システムとしての側面も持っている。しかし、生活世界とシステムとを媒介する機能を積極的に維持し、より良い地域モデルを構築するための議論を継続していることから、ここでは市民的公共圏としての側面から捉えている。

人々がコーヒーハウスに集い、自由闊達に議論する文芸的公共圏を母体としていた。菜の花プロジェクトもまた、琵琶湖の環境保全を目指して、滋賀県全域で地域の草の根の活動として広まり、定着したせっけん運動が母体となっている。どちらも、生活世界に密着し、継続的なコミュニケーションが存在する活動を母体として、市民的公共圏が形成されているのである。

こうして形成された市民的公共圏は、それが十全に機能するために「対等性」「柔軟性」「公開性」という3つの基準を満たす必要がある。このことは、前章での分析において検証し、述べたとおりである。一方、その基準を満たした市民的公共圏も、現代の複合的な社会の中でその構造を複合的に変化させ、場合によっては3つの基準が崩れて生活世界のコントロールを喪失し、存続できなくなる可能性を常にはらんでいる。この課題に対して、菜の花プロジェクトでは、どのようなチャレンジが試みられているだろうか。

3章で述べたように、ハーバーマスは、現代の市民的公共圏の複合化を、「空間」「内容」「抽象度」の側面から指摘したが、筆者はその指摘に加え、「空間」「内容」「抽象度」がそれぞれ「広域化」「専門化」「抽象化」していく中で、3つの基準を維持できなくなり、構造転換していく可能性があることを指摘した。これに対して、菜の花プロジェクトは、複合的な市民的公共圏のあり方を、複合的なままに維持発展させ、なおかつ生活世界に近い部分とシステムに近い部分とのインタラクティブ(相互補完的)なコミュニケーションを維持しようとしていると考えられる。「空間」の部分では、地域を基盤とした具体的なプロジェクトとしての菜の花プロジェクトと、その全国的なネットワークとしての菜の花プロジェクトネットワークという2つの空間を持ち、それぞれの空間でのコミュニケーション、あるいは空間相互のコミュニケーションをさまざまな工夫で有機的に機能させる、二層のコミュニケーションを維持している。「内容」の部分では、「全国菜の花学会・楽会」のオールセッション的なプログラム構成にもあるように、草の根の市民の立場からの関わりと、専門家的な関わりという「市民と専門家」間のインタラクティブ、あるいは「市民と市民」、「専門家と専門家」間のインタラクティブを有機的に

作り出す工夫がなされ、ここにもまた二層のコミュニケーションが成立している。一方、「抽象度」の部分については、菜の花プロジェクトが抽象的な公共圏を形成しうるまでの政策課題としての一般化が進んでいるわけではないので、今後の課題ということになるだろう。言い換えるならば、地域政策として、あるいは国全体の政策として菜の花プロジェクトが認知されたとき、先の「空間」ないし「内容」の部分でのチャレンジを維持継続できるか、これが、菜の花プロジェクトの市民的公共圏としての分かれ目になるのではないだろうか。

これらの特徴を踏まえると、現代において市民的公共圏を形成し、存続させるためには、次の3つの条件が必要であるといえよう。第一に、その市民的公共圏が、親密圏たる生活世界にしっかり根づいた継続的なコミュニケーションのある活動から立ち上がっていること。第二に、その市民的公共圏が、「対等性」「柔軟性」「公開性」という3つの基準を満たしていること、第三に、その市民的公共圏が、自らの複合化を受け入れ発展させつつ、その中で二層のコミュニケーションを維持していくこと、である。

## 6. むすびにかえて

菜の花プロジェクトは、その地域的な実践としての菜の花プロジェクトの側面も、全国的なネットワークとしての菜の花プロジェクトネットワークの側面も、いわゆる市民活動的实践として非常に興味深く、魅力的なものである。また、こうした市民活動的实践の中では珍しく、実践者自らが知見の理論化、体系化、共有化に熱心であり、それが「菜の花サミット」「全国菜の花学会・楽会」の開催という形で現われている。一方で、筆者の感想としては、研究関心がプロジェクトを成功させるための技術的な側面に偏り、格好の社会科学的な研究課題であるにも関わらず、その側面からの分析がほとんど行なわれていないことを感じていた。このことを、菜の花プロジェクト側に率直にぶつけてみたところ、先方もその必要性を認めており、筆者の研究成果の還元に大きな期待を寄せていた。筆者としても、本稿を通じて得た知見を再び菜の花プロジェクトの場に還元し、さらなる

研究の精緻化を図りたいと考えている。

また、限られた研究期間の中で、菜の花プロジェクトの地域における実践の現場、あるいは全国のネットワークの実際の活動に触れる機会が十分でなく、インタビューや文献、資料研究の比重が大きくなったことを認めざるを得ない。そのため、菜の花プロジェクトの中で実際にどのような形で討議が行われてきたのかを、十分に調査することができなかった。この点についても、今後の菜の花プロジェクトとの付き合いの中で実践との触れ合いの度合いを増やし、研究上の想像力を豊かなものにしていく必要がある。

今回、菜の花プロジェクトの分析を通じて得た、「現代における市民的公共圏形成・存続の条件」は、単に一つの事例における分析結果としてあるものではなく、より普遍性をもった条件として企図されているものである。それゆえに、今後はほかの事例研究にも適用を考えながら、より精緻化、普遍化を図る必要がある。多くの実践との触れ合いの中での研究的営みを通じて、地域づくりの現場において新たな社会の実現を目指している、多くの市民に一つの道具立てを提供することができたなら、それは筆者の幸いとするとところである。

## 参考文献・資料

### <文献>

阿部潔『公共圏とコミュニケーション』ミネルヴァ書房、

1998年。

藤井絢子『菜の花エコ革命』創森社、2004年。

Habermas, Jürgen, *Theorie des kommunikativen Handelns*,

Frankfurt am Main : Suhrkamp Verlag, 1981. [邦訳] 丸山高司他訳『コミュニケーション的行為の理論 下』

未来社、1987年。

———, *Der Philosophische Diskurs der Moderne*, Frankfurt am Main : Suhrkamp Verlag, 1985. [邦訳] 三島憲一他

訳『近代の哲学的ディスクルス』岩波書店、1999年。

———, *Strukturwandel der Öffentlichkeit : Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*,

Frankfurt am Main : Suhrkamp Verlag, 1990. [邦訳] 細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換 第2版』未来社、1994年。

———, *Faktizität und Geltung : Beiträge zur Diskurstheorie des Rechts und des demokratischen Rechtsstaats*,

Frankfurt am Main : Suhrkamp Verlag, 1992. [邦訳] 河

上倫逸・耳野健二訳『事実性と妥当性—法と民主的法治国家の討議理論にかんする研究(下)』未来社、2003年。

花田達朗『メディアと公共圏のポリティクス』東京大学出版会、1999年。

Schumacher, E. F., *Small is beautiful : a study of economics as if people mattered*, Blond and Briggs, 1973. [邦訳] 小

島慶三、酒井懋訳『スモール・イズ・ビューティフル：人間中心の経済学』講談社学術文庫、1986年。

### <報告書>

第3回全国菜の花学会・楽会 in 東近江実行委員会『2006・第3回全国菜の花学会・楽会 in 東近江報告集』2006年。

### <ウェブサイト>

菜の花プロジェクトネットワーク (<http://www.nanohana.gr.jp/index.php> 2007年3月18日閲覧)